

埼玉選手権 それぞれの道

現役高校生、OB大学生の活躍

午後から降雨となった県選手権最終日、私は来期を目指す春高2年生とOB大学生たちが競技し頑張っている姿を観戦にいった。

県選手権は入賞すると関東選手権へも出場可能な、年齢問わずの競技会だ。したがって春高のかつては同じチームで走った先輩後輩が異なるチームで競い合う興味深いレースも見られた。

「強い埼玉」を支える人々のありがたさ

私もこの年齢(自分の中小会社を運営しなければならない年齢)になって、改めて陸上を支えてくださる方々の偉大さを感じる。審判をしてくださっている方々を見ると、私が高校生であった時代から変わらず続けている先生方も多々いらっしゃるのだ。けっして派手な表面化しやすい仕事ではないのはもちろんだ。しかし毎週末を競技場に向かい、家庭を顧みず、雨風の中、あるいは炎天下に中、競技会を支えてくださっているのだ。

私は中学高校時代なぞ、そんなことは全く頭の中にはなかった。埼玉の陸上は、こういった先生方の「埼玉の陸上を愛する無償の尽力」の上に成り立っていることを痛く感じさせられた。ありがたいことだ。とうてい私なんぞの意識の低さでは不可能だ。ただただ脱帽である。

物事を成す…ということは、必ず後ろで無償で支えてくれる人たちが多々いる。試合、学校クラブ、仕事…どんな事でも。それがやっと私も分かるようになってきた次第だ。

OBとのつながり

私は伊藤祐一郎や高橋 大らの写真を撮影したかった。関東インカレを観に行こうと思っていたが、埼玉県大会があったためそれは叶わなかった。高橋は肉離れで出場できず、伊藤は200mとリレーで入賞を果たした。後藤は痛めた脚の様子をみながら走った。田中は麻疹による団体欠場を強いられた。

みな環境が変わっても、それぞれ頑張っている。



卒二年目になった高校 58 回卒組は、大学生活にもなじみ、元気に活躍しはじめている。いかんせん、全く接点のない業種の私の元にはそれくらいしか選手の近況が入ってこないのも、他にも卒後競技を続けている者がいれば競技場で声をかけてほしい。

春高卒後、どのように競技と向き合うかは個々の裁量によるだろう。

大学で飛躍的に力を伸ばすものもいるだろうし、勉強優先で影響がでない程度に継続するものもいるだろう。あるいは、まったく別のスポーツに取り組むもの、高校時代に完結して競技に終止符を打つものだって多々いよう。春高の部風に慣れてしまい、大学上下関係の軋轢に辞めるものがいたっておかしくない。

それでいいと思う。卒後の温度差はあって当然なのだ。

ただ、春高陸上部には誇りと愛着を持ってほしい。

卒業したら誰もがわかるだろうが、春高陸上部は一切の強要をせず、全員が自らの意思で競技を続けることができた稀なチームなのだから。

新 主将 前田

「91」番のゼッケンは弓削から前田に引き継がれた。スタンドで高野に聞くと、前田は調子がいいとの事。跳躍班としては逆井も幅で6m50に迫っているし、前田の三段も来期は14mの大台、そして関東を徐々に狙える可能性も出てきた。秋には高野も6m50に届くと信じている。高跳びもそろそろ春高記録更新を期待しよう。



降雨と回る風に悩まされた前田の三段であった。

結局一本目の跳躍を無難にまとめ13m28をマークした。競技開始から逆風に悩まされ、結局決勝の4本目からはピットを逆にしての試技となった。前田はまだまだリズムがつかめていない様子であったが、高校生の三段跳びはフォームとリズムがピタッと合致すれば、簡単に数十センチは伸びると聞いている。「ゼッケン91」の重責はあろうが、これから一年リーダーとしての活躍を期待する。

後藤と伊藤

100mには伊藤祐一郎と後藤乃毅が出場した。向かい風が回るその日の熊谷は、100mにはつらかったようだ。伊藤は一組で5着にとどまり、私は「ああっ……」と思わず声を出してしまった。

後藤は2着通過。軽く走ったいつものフォームは、昨年と大きな変化はないように見えた。



後藤はゴール後、涼しげな顔でスタンドの私にニコッと頭を下げた。
脚の様子も悪くはないようで一安心だ。
しかし曇天の熊谷競技場の朝 10 時は肌寒く、故障が再発しないことを願った。

全て予選レースが終了して、アナウンスが流れた。
組では 5 着だが、プラスで伊藤は準決勝に残った。

「やった！」

やはり風が回るコースは、着順以外に最後までフィニッシュが大きく左右する。
0.01 秒単位の重要さを、あらためて認識する結果となった。

1500m の予選では徳永が決勝進出を果たした。
大塚さんに前日聞いてはいたが、本当に坊主頭での登場だった。

「……うーん、気合入ってるなあ……」

「1500m 残りました。がんばりますっ！」

徳永と話すのは、2 年前の千葉インターハイの近くの
ハンバーグ屋以来であったが、相変わらず礼儀正しい。



後藤の決勝

ふとレース前に私は思った。

意外にも後藤の 100m を見るのは、インターハイ以外では始めてであった。

ただあまりにも鮮烈に焼きついているため、そのインパクトが強すぎたのだろう。たいていは東部から関東までは日曜日に 200m なので、毎年 8 月 3 日のインターハイ 100m 決勝でしか彼のレースを見ていなかったのだ。

準決勝は後藤と伊藤が同じレースを走った。伊藤は惜しくも決勝を逃したが、すでに 400mR で 3 位となり関東選手権の資格を手に入れている。関東では 40 秒台を目標に頑張してほしい。



続く決勝ではついに空が泣き出し、低温、降雨、向かい風の最悪のコンディションとなった。

「ああ、これじゃ後藤は走ると傷が再発するかも…出走しないかな…？」

ところが決勝のレーンには後藤が並んでいた。

私はカメラのファインダー越しに
幾度目かになる後藤のスタート前を覗いていた。
アナウンスでコールされ、手を挙げて一礼するスタイルは
「ああ、いつもの後藤だ…」と安心した。



1日で3レースするのは高校国体以来かと思うが、
脚のほうは心配なさそうだ。
今回は試運転の意味もあったのだろう。

前日の調整を春高で行った後藤は、大塚さんと調子について相談していた。
「完調にはまだまだです。…記録的には、脚が傷まず
風が追って気温、気候がよければ10秒6台かと…」
大塚さんも「うん、それくらいだろうな。今、あわてて仕上げる意味は全くないからな…」

結果は4位であったが、今回のレースは調子を確認しているようだった。
降雨、向かい風、低音で記録的要因はなくなったので、妥当な結果である。

そもそも後藤は、日本 Jr、高校総体で100mを制覇する「究極の結果」を残した子だ。
18歳でひとつの「完成」に行き着いた選手が、大学入学後もとんとん拍子に伸び続けるほうがおかしい。
成長盛りの中学生ではないのだから。
逆にインターハイチャンプが順当に記録を伸ばし続けるほうが極めて少ないといえる。
タイトルを獲った以上、注目度は高いだろうが、あせって故障が続き、
消えていく選手のほうのはるかに多いだろう。

あの為末選手や池田久美子選手であっても復調にかなりの時間を要した。
同期でいうと、スーパーな中距離選手であった常勝・小林 祐梨子(須磨学園高卒)も
進学後の日本選手権で代表から落選する4位であった。
高橋モモコ選手は100mで勝ったが、Jr記録保持者の中村宝子選手は200m4位と敗れた。
歴史的に見ても、後藤の自己記録にあたる10秒3台は
シニアのトップでも簡単に出せる記録ではないのだから。

大塚さんも、本人も言うように二年間くらいをかけてスケールアップすればいい。
私もそう思う。

ほかのOBと同様に、自らの見識や価値観、競技観でスポーツに取り組んでいけばよいだろう。

彼は、すでに「やることをやった」のだから。



熊谷では後藤やご両親ともお話しできたが、やはり目先の10年より私は卒後50年のスパンでお付き合いをしていきたいと願っている。極論を言えば、後藤が仮に五輪に出場しようと、故障で記録更新できずに引退しようと私の気持ちに変わりはない。親も監督も、そして私も「子を思う気持ち」は変わらない。

常に言ってきたように、「野球で三振をした息子を、サッカーでシュートを外した息子を見捨てる親はいない。罵声をあびせるファンがいたなら、それはファンとは言わない。」

私は2030年くらいの大塚監督OB会で、伊藤や奥岡、村松、高橋、後藤や田中、石川、伊藤直樹・・・他、多々後輩たちと酒を飲んでいた。 (呼んでももらえればだが・・・)

その時は年老いた私に優しくしてね、後藤・・・(泣)

1500mの徳永激走

「いやあ・・・ぎりぎりの決勝ですよ」と言っていた徳永であったが、1500m決勝ではセカンドグループを形成し中盤に粘った。ラスト一周で10位あたりに位置していたが、直線で抜け出し見事8位入賞を果たした。9位10位を僅差で抑えての見事なスパートであった。大幅な自己新記録。会場(春高OB)はヒートアップした。



徳永は予選でも3分台に突入しているし、前日の3000mSCでも15秒もの自己記録更新で4位入賞を果たしていた。徳永は爆進中だ。

1600mRの春高魂

競技を締めくくる恒例のマイルリレー決勝は春高のOBが冴え渡った。

理科大の2走4走に春高OBの高橋、村松が走る。

この二人は実に面白い事に、春高時代は跳躍選手だった。

高橋 大は幅跳びで、村松は棒高跳びをこなしていた。

大塚さん曰く「バトンを持たせたらこの二人はめっぼう速い」という。

57回村松は春高棒高歴代5位の4m30cmを持つ関東大会出場選手だ。

2004年の関東は熊谷で開催され、松村は初日の棒高跳びに出場した。

マイルで関東に駒を進めていた春高は、三日目のマイル予選に村松を起用した。

「マイルに村松？ポールの？」と、埼玉の関係者は大塚さんの采配にびっくりしたようであったという。

しかし大塚さんには確固たる確信があった。

校内で300mをやらせると、村松は常にスプリンターを凌駕するほど速かったという。

関東初日の棒高が終わり、大塚さんは村松に言った。

「二日目以降はもうフリーなんだから、マイルやってみないか？」

「はい、走りたいです」

こうして棒高の村松のターニングポイントが生まれた。

もちろん村松は好走。短距離への可能性を開拓した瞬間であった。

今大会は200mで惜しくも決勝を逃したが、関東インカレの標準に迫るまでの域に達している。

高橋は言わずと知れた千葉インターハイの400mR3走、

41"17 伊藤ユウ・奥岡・高橋タカ・後藤の現・春高記録保持者だ。

400mRも1600mRどちらもいけるロングジャンパー(?)なのだ。

今年は肉離れで関東インカレは悔しい欠場を余儀なくされたが、もはや完全なる一流スプリンターだ。

マイルの決勝は完全なる降雨の中スタートした。

1走でダンゴ状態でバトンを繋いだ状態を打破したのは理科大の2走、高橋 大だ。

バックストレートでトップを獲ると上位3チームがトップ集団を形成。

3走者につないで、そのままの状態アンカー勝負となった。

大塚さんは、そのすべてを第三コーナーの高跳び審判として釘付けになって見ていた。

いよいよアンカーの松村。

200mを過ぎたあたりから先頭を奪い、最後の直線で突き放しにかかった。

危なげない走りでもってトップで歓喜のゴールを決めた。



徳永は「うち(理科大)は3分17秒を切りたいです…」と言っていたが、予想をはるかに上回る3分15秒台をマークした堂々たる優勝となった。

この結果にかつて大学時代、県選手権を制した徳永 剛(54回春高 横国卒)は、「すごいですね！進学後も頑張ってくれる後輩をみると励みになります」と語っていた。

また理科大OBの吉田(49回)は、「そのマイル記録は、理科大新記録ですよ！見たかった！」と直属の後輩たちに喜んでいて。

今回は山崎の肉離れもあってマイルに不参加であった春高2年生たちは、この先輩たちの活躍をどう見たであろうか。

マイル決勝には松山高校、春日部東など大学、社会人に混じって高校のチームも出場している。決勝の栄光の8チームに入れなかった悔しさは、脳裏に焼きついている事だろう。

「ヒーローになりたい…」という気持ちがなければスポーツの楽しさは無い。

埼玉選手権春高の結果 そして秋へ

大塚さんと江森先生とで合宿の夜お話を聞くことができた。

ロードランナーでもある江森先生が長距離班をペース走で牽引し、必死に食らいつく1,2年生。その中で県選手権を戦った青山は競歩で入賞、大幅な自己記録更新を果たした。来年も埼玉の「競歩常連高校」の位置は揺るぎそうも無い。3000mSCで丸山はついに9分30秒台に突入した。シニア選手とのレースで多くを学んだことだろう。あと10秒短縮できれば、久々の春高3000mSC関東も見えてくる。つまり春高新記録で関東出場だ！

110mHの寺田も念願の公認15秒台をマークし「これで気持ちよく引退できます」と語ったそうだ。

高島のインターハイ、そして新人戦と実に楽しみなシーズンが続く。

6月22日(金)

5000mW

青山 竜太 2 決 25'11"77 8位 自己新

4×100mR

予 43"71 2着 準 43"31 5着 芹澤・山崎・中塚・高野

棒高跳 弓削 武蔵 3 決 DNR

ヤリ投 黒須 貴浩 1 決 46m91

6月23日(土)

4×400mR 予 棄権

200m 山崎 雄太 2 予 22"17 +0.8 準 22"19 -1.9 決 51"08 -0.4 8位

B110mH 高石 彰 1 決 16"20 +0.1 4 位
110mH 寺田 壮志 3 予 15"91 +0.7 自己新
中塚 雄太 予 16"17 -1.6
3000mSC 丸山 佑太 2 決 9'39"98 8 位 自己新
走幅跳 決 高野 将弘 2 決 6m26 ±0 26 位
逆井 智也 2 決 6m49 +1.2 17 位 自己新

6月24日(日)

三段跳 前田 薫 2 決 13m28 -1.0
走高跳 山本 卓矢 2 決 記録無

筆 撮 陸上に比較的くわしい歯科医 のもと